

# 不連続ブログ小説 「頑張れ花子！」

## 第四話

「ふううー、やっと片付いたわ」

花子は、ケイコが残っていた山のような洗いものを、使い捨ての手袋を上手に利用してなんとか片付け終えました。

ソファに座り一息ついた花子でしたが、二児の母親に与えられる安息の時間は、そう長くは続きません。

「お母さ〜ん、オフロ入ろ〜よ〜♪」

お腹が満たされたミスアトからの新たな要求・・・  
花子は浴槽に湯を張り、着替えを準備します。

「さあさあ、オフロに入るわよ！」

花子の一声で、ミスアトはすぐに服を脱ぎ始めます。  
タダシは、ソファに座ってテレビを観ている時のタダシの集中力には特筆すべきものがあります。  
お気に入りの番組を観ている時のタダシの集中力には特筆すべきものがあります。

花子は引きずるようにタダシを浴室前へと連れて行きました。

若干の抵抗を試みたタダシでしたが、浴室前へ来ると、諦めたのか、服を脱ぎはじめました。

三人で仲良く湯船に浸かります。

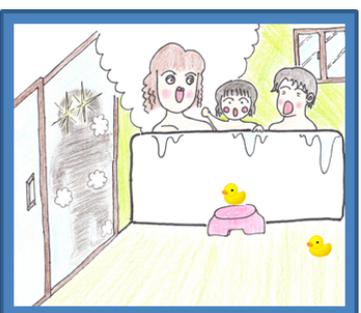
ミスアトが幼稚園で覚えてきたばかりの歌を歌い始めると、タダシもミスアトにあわせて歌い始めます。

浴室の中で反響する二人の歌声・・・花子の顔に自然と笑みが浮かびました。

と、その時・・・

タダシとミスアトの歌声にあわせるように、中途半端にオペラ調の歌声が聞こえてきました。

浴室の不透明の扉の向こう側に・・・  
見た事のあるためのシルエットが見えます。



「花子さあ〜ん！」

シルエットの正体・・・ケイコでした。

「オフロに入った時に、手のマッサージをするのも手荒れ予防に効果的なのよお！」  
ケイコはまだ、喋りたりなかったのか、浴室の扉越しに話しはじめました。

「指先の方から、根元の方へと、指を一本一本マッサージしていくのよ！  
手荒れが酷い時はあまり擦らないように、手のひらは親指で指圧するようにマッサージするのよ！」

ケイコの話に耳を傾けながら、花子は手際よく子供たちの体を洗っていきます。

「オフロの時以外にも、寝る前なんかにはマッサージするのもいいのよ！」

花子は、何故このタイミングでその場所から話しかけてくるのか疑問に思うところもありましたが、自分たちのことを心配してくれていることだから・・・と自分に言い聞かせ、その点については不問としました。

「ハンドクリームを使うのもいいわね。  
自分の手にあっただハンドクリームを使って、手荒れを予防しつつ・・・  
正しい方法で手洗いするのが感染症の予防にはとっても大事なことのよ！・・・」

それにしても止まらぬケイコの話しっぷりに、花子はなかなか自分の体をあらうことができせん。

「そうそう、私が使っているのと同じハンドクリーム、花子さん宛てに届くように注文しておいたわ・・・。よかったら使ってみてちょうだいね。」

そう言っただケイコは、また2階へと戻って行きました。

「お母様・・・。」

タダシとミサトのことだけでなく、花子のことにも気遣ってくれるケイコの優しさに花子は感動を覚えました。

花子と子供たちがオフロからあがってくつろいでいると、チャイムが鳴り響きました。

どうやら宅急便のようです。

手渡された荷物の包みは花子宛てられたものでした。

そこには、「ハンドクリーム」の文字・・・

「すみません！ここにサインと・・・・・・・・・・お願いします！」

「お母様・・・・・・・・」

用意周到なケイコの贈り物に、花子の目頭が熱くなります。

「お母様・・・・・・・・お風呂の時、ちょっとウザいって思ってしまったて・・・・・・・・ゴメンナサイ・・・・・・・・」

花子は自責の念にさいなまれ、その場に立ち尽くしてしまいました。

無論、宅配員の声は花子には届いていません。

「あゝ、すみませんが・・・・・・・・」

目を赤くし、立ち尽くしている花子に、恐る恐るの宅配員・・・・・・・・。

「あ、すみません、サインですね。今、印鑑を持ってく・・・・・・・・」

花子が印鑑を取りに行こうとすると、宅配員は、

「印鑑もなんですが、お支払の方を・・・・・・・・」

と、伝票を渡してきました。



「ち着払い・・・・・・・・？？？　　ってか、高っ！」

おそらく・・・・・・・・お母様に悪意は無いんだ。と必死に自分に言い聞かせる花子でした。  
おそらく・・・・・・・・。

頑張れ花子！　　負けるな花子！